



北海道大学

学問・研究の倫理

仮想事例集

1. 「研究の方法」



大学院生のムラヤマは、はじめてフィールドでの調査を行うことになった。



調査の目的や方法に問題がないことを指導教授にチェックしてもらったところ、この種の調査は一般的に行われており、特に問題はないので調査を行ってもよいと言われた。念のため、論文を投稿する予定の学会の研究倫理規定も調べてみたところ、自分のやろうとしている調査がひっかかるような規定は見あたらなかったもので、安心していった。



ところが、別の分野の大学院生の友人と雑談をしているときに何気なく自分の研究計画について話したところ、「それはちょっと問題があるのではないか」と言われ、議論になった。



友人は、ムラヤマが研究協力者の政治的な活動に関わる
ことについての問題を指摘する。ムラヤマの研究テーマは「あ
る地域に住む人々が開発と環境保全を争点とする政治参加を
通して持続可能な社会を実現しようとするあり方についての参
与観察」であるため、地域の人々が行う集会やデモや座り込
みにも研究の一環として一緒に参加することになる可能性が
高い。



そうなった場合でも、ムラヤマ自身は、研究協力者の人々の政治的意見については特に積極的に肯定するのでも批判するのでもない立場をとり、集会やデモや座り込みには「当事者」としてではなく、あくまで「研究者」として参加するつもりである。そう話すと友人はやや批判的な口調で、「そのような態度で集会などに参加するのは、当事者の人たちに対してどこか不誠実なところがあるのではないか」と主張する。



また、友人の研究領域では、研究を始めるにあたって研究協力者から書面で研究参加への同意を得ることが何よりも重要であるらしい。書面での同意には、研究協力者を保護するという目的だけでなく、何か問題が起きた時には研究者自身を守る役割もある。例えば、「いつでもオプトアウトできる(研究を取りやめる)権利」を研究協力者に書面で保障しておくことが、研究者にとっても非常に重要になってくる場面があるというのはよく理解できる。



しかしながら、友人の主張するような「とりあえず研究を始める前に書面で同意をとっておけば問題ない」という態度では、かえって研究開始時における研究協力者との関係を硬直化させてしまう場合があるかもしれない。ムラヤマのような研究分野では、まず研究協力者から仲間として認めてもらわない限り調査の最終的な成功が望めないため、最初から書面での同意を得ることに過度にこだわることは逆に望ましくないようにも思える。



だが友人は絶対にそれが必要だという。それに対し、ムラヤマは継続的な人間関係に基づく相互の信頼こそが調査研究倫理の本質だと考えているのである。



ああでもない、こうでもないと友人と話していると、隣の研究室の先輩がやってきて、「それぞれの領域で認められているのであれば、それに従っておけばいいんじゃないか」と言った。確かに、自分の分野の専門家である指導教員や学会の倫理規定が問題なしとしているのだから実際に問題はないのだろうが、友人の指摘にも一理あることは否定できないように思われる。



ムラヤマはどのように考えればいいだろうか？また、あなたがムラヤマと同じ立場にいたとしたら、どうするだろうか？



眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、27-28ページ。



2. 「古いスタイル」のボス」



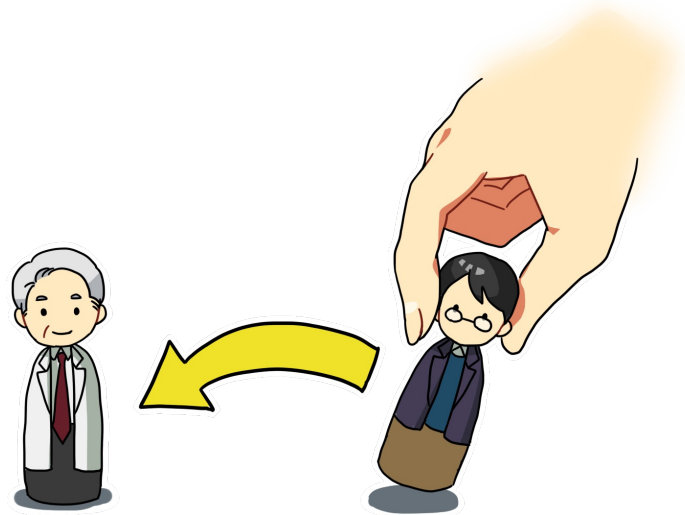
トヤマはある分野で博士号を取得したばかりの若手の研究者である。
その分野は近年国内外の注目を集めている新興の学術領域で、理論
的探究だけでなく実践を重視する点に特徴がある。



また、社会的にもその研究成果が教育現場に適用されることが期待されており、日本でも関連する科目が多く大学の開講され始めている。トヤマの研究領域は、人文・社会科学としてはめずらしく、狭い意味での専門を超えて広く教養教育全般に影響を及ぼしつつある。



この春からトヤマは特任助教としてある大学に勤務している。幸運なことに、この分野の第一人者であるフクイ教授から声をかけてもらったのである。フクイ教授とは学会や研究会でよく会い、自分の研究テーマに関心を寄せてもらっていた。送った論文にもいつも丁寧にコメントをくれる先生であった。そのフクイ教授が所属する大学でも新しく科目を立ち上げることになり、一緒にやってみないかとの打診を受けたのである。



3年の任期付きであるとはいえ、第一人者と一緒に仕事をできるまたとない機会に「ぜひやらせてください。どんなことでも精一杯がんばります」と二つ返事で引き受けた。



意気軒昂と新生活を始めたトヤマだったが、次第にフクイ教授に不信を抱くようになってきた。新しい科目の内容を精査するためと言われて、フクイ教授が担当する科目を学生と一緒に受講するのはまだわかるが、将来の練習のためにと講義資料の準備や課題の採点などをこちらに丸投げしてくるのはどうも納得がいかない。



この週末も月曜日に返却する課題の採点をしているときに、
「ご苦労様。この週末は久しぶりに学会もなく、おかげで家族と
ゆっくりできました」というメールを読んだ時には何とも言えな
い気分になった。



さらにトヤマの頭を悩ませているのが、フクイ教授が代表を務める研究プロジェクトである。多くの研究者が参加するこのプロジェクトで、トヤマには現在行っている教育の有効性を検証するという研究テーマが与えられている。トヤマ自身は教養教育のような領域でその有効性を測定すること自体が不可能ではないかと考えているが、フクイ教授はこの教育をさらに普及させるために定量的な具体的データが欲しいと言う。



この前の打ち合わせでは、数を集めるために科目の課題の中に有効性を測定するための設問を入れてみてはどうかと提案された。成績評価の対象となる課題にそのような設問を入れて、いわば強制的に回答させることには問題があるようにも思うが、今のトヤマの立場ではフクイ教授の提案は受け入れざるを得ないとも考えている。



さて、トヤマは、この状況でどうすべき(どうすることが倫理的に許容され、また倫理的に要請される)だろうか？また、あなたがトヤマと同じ立場にいたとしたら、どうするだろうか？



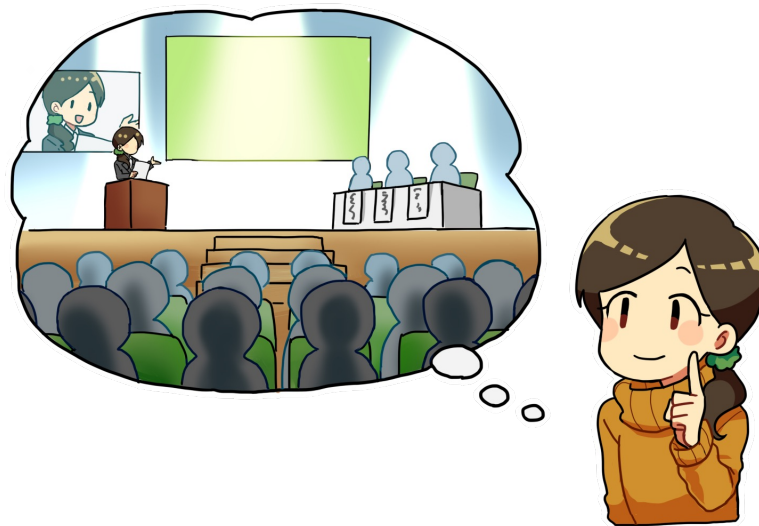
眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、89-90ページ。



3. 「キャリアと研究費」



大学院生のムラヤマは、非常に名誉ある国際学会での討議でパネリストとして登壇することが決まった。このパネルに登壇することは世界水準の研究者として認知されるための登竜門とされており、実際に国内の著名な研究者の多くは過去にそこで登壇した経歴を持っている。これは、ムラヤマが研究者としてのキャリアを飛躍的に向上させるための唯一無二のチャンスである。



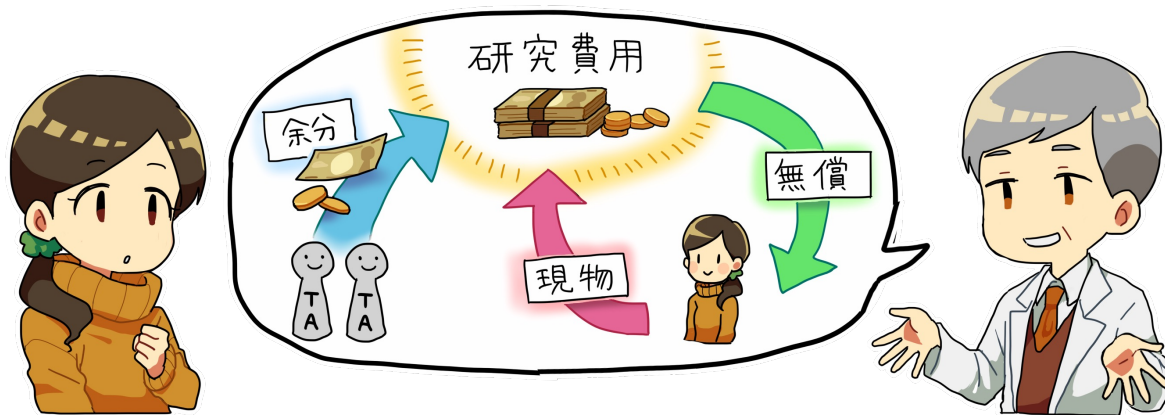
しかし、ムラヤマは、いくつかの問題を抱えている。討議内容は「未発表のオリジナルであること」が条件とされているが、あいにく手元にそのようなものがない。確かに、地方学会での研究発表の内容や、大学紀要に他の研究者と共同執筆した論文の内容でお茶を濁すことは、ひょっとしたら実行できるかもしれない。しかし、悩んでいる時間はない。予稿提出の締め切りは3日後で、電子システムで一元的に受け付けるため締め切りの延長はできないからである。



また、別の問題もある。国際学会は国際線の繁忙期にあたる時期に海外で開催され、また学会参加費は大学院生には工面しきれないほど高い。確かに、旅費や学会参加費の捻出にあてられそうな研究経費をムラヤマは一つだけ使うことができる。しかし、予定されている国際学会での発表内容は、その研究費が指定する研究目的や研究内容とはどう考えても全く関係がない。



隣の研究室の准教授であるカワシマに相談したところ、ムラヤマの事情を察したカワシマは、自分が研究分担者として参加している大型研究費を用いることを提案した。その提案によれば、学部生のアシスタント(Teaching Assistant)に「書類上少し余分に働いてもらった」分の謝金を研究室の金庫に還流させて貯めてある「研究経費」を無償で貸してくれるという。貸した同額分を、ムラヤマの研究経費を用いて消耗品扱いで購入した現物で返してくればよいというのである。この「取引」もまた、実行不可能ではないかもしれない。



さて、ムラヤマは、この状況でどうすべき(どうすることが倫理的に許容され、また倫理的に要請される)だろうか？また、あなたがムラヤマと同じ立場にいたとしたら、どうするだろうか？



眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、113-114ページ。

4. 「よい学生、悪い指導教員？」



大学院生のムラヤマは、現在博士論文の執筆に取り組んでいるが、ひとつ大きな悩みを抱えていた。ムラヤマは、自分の指導教員エドガワ教授が、自分に対して適切な論文指導をしていないのではないか、という疑いを持っている。



論文のテーマを設定する段階から、エドガワ教授は特に何もアドバイスをせず、「君のやりたいテーマをやりたまえ」と言って、ムラヤマに丸投げしたのであった。



ムラヤマは、毎年少なくとも1本の論文を学会査読誌に投稿して順調に業績を重ねているが、それらの論文執筆にあたっても、エドガワ教授はほとんど何も指導してくれなかった。博士論文についても、すでに十分な量の草稿を書き上げ、エドガワ教授に提出しているにもかかわらず、博士論文草稿に関するチュートリアルは毎回非常に短い。回数も少なく、月に1回あるかないか程度であり、ムラヤマは自分の研究を進めるペースがうまくつかめないと感じている。



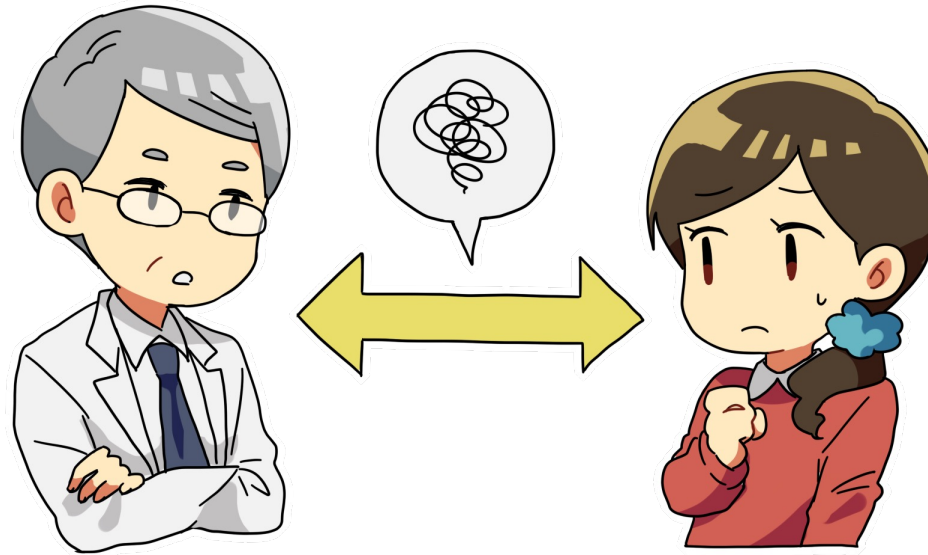
さらに、チュートリアルでのコメントやアドバイスは、量が少ないだけでなく、それらの内容も表面的なものや的外れに感じるものの方が多いため、実はエドガワ教授は提出した草稿をまともに読んでくれていないのではないかとムラヤマは不信感を募らせている。



ムラヤマは何度も指導教員を変更してもらおうかと考えたこともあるのだが、残念なことに、ムラヤマの所属する学術機関で、ムラヤマの取り組む研究テーマについて最もよく知っているのは、エドガワ教授ただ一人である。そして、エドガワ教授は、専門領域の学界では世界的に評価の高い研究を行っていることで有名な大物研究者であり、大型の競争的外部資金を獲得しているし、数多くの著書や論文の研究業績を持っている。



さらに、ムラヤマも所属している学会の他の研究者からの評判も高く、いくつかの全国学会の理事を務めており、下手なことを言って関係が悪くなれば、今後の学会発表や論文投稿に差し障りが出るかもしれない、とムラヤマは心配している。



さて、ムラヤマは、この状況でどうすべき(どうすることが倫理的に許容され、また倫理的に要請される)だろうか？また、あなたがムラヤマと同じ立場にいたとしたら、どうするだろうか？



眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、129-130ページ。

5. 「メディア露出」



学術機関の人文・社会科学系の部局に所属するフジタ准教授は、一見すると何の役に立つのかがよく分からないテーマについて、同僚からの揶揄にもめげずに地道に研究を続けてきた。その研究成果が、地方紙の記者に注目され、ようやく新聞紙上で大きく取り上げられることになった。それをきっかけとして、全国紙やテレビ・ラジオでも取り上げられるようになり、徐々にその名が知られるようになってきた。



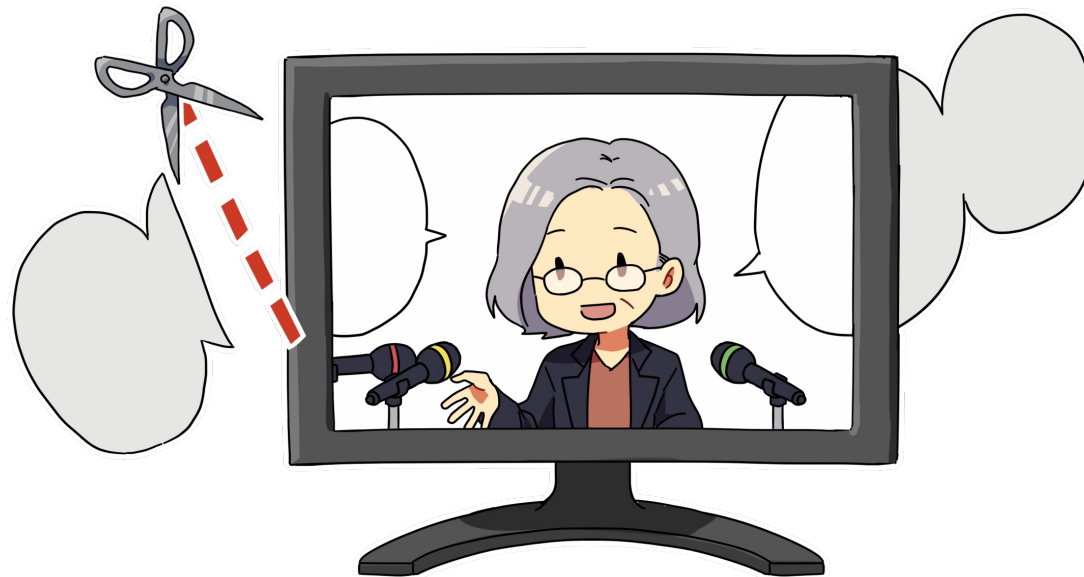
一般的に、自然科学系の研究と比べて実用性や社会貢献度が低いと思われがちな人文・社会科学領域だが、その中でも、フジタ准教授の研究は輪をかけて実用性や社会貢献度が低いとみなされる傾向にあるものであった。ところが今回、フジタ准教授の研究が今後発展していった場合に得られる研究成果について、大きな社会貢献につながる潜在的可能性があることが広く社会に評価されたのである。



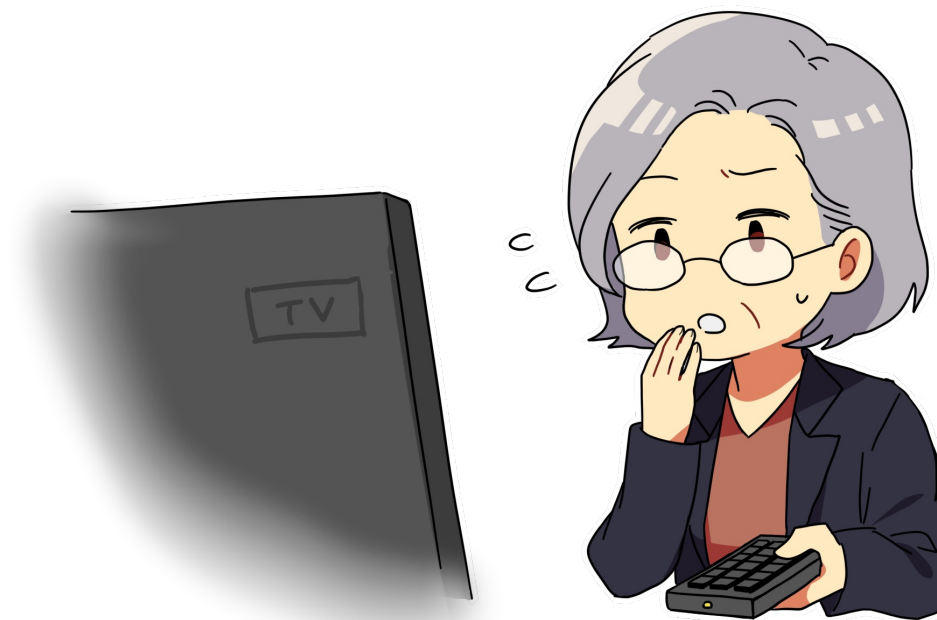
フジタ准教授は、地道な研究を好み、派手なアピールを嫌う人物であり、メディアに露出することには気が進まなかったのだが、メディアへの露出は、関連する学会の社会的意義をアピールすることにもつながるため、全体のことを考えてしぶしぶ引き受けることにしていた。また、そうしたフジタ准教授の人柄もあり、お世話になった研究者や所属する学術機関の同僚も好意的に見てくれている。



しかし、そのうち、フジタ准教授が発言していないことが本人の発言として報道されたり、また、発言したことがあまりにも部分的に紹介されたために本意と異なって伝わっていたりする場合が多くなってきた。そのうちに、フジタ准教授の専門外の分野や、全く知らないことについてコメントや意見を求められることが多くなってきた。



「私の専門外なので、私個人の意見ですが」という前置きをつけてコメントをしても、その前置きはカットされて、コメント部分だけが流通してしまう。このようなことが続き、フジタ准教授はメディア露出に嫌気がさしてきた。



同じようにメディア露出の多い知り合いの研究者に相談したところ、「社会貢献には変わらないし、みんなもそれを望んでいて喜んでいるのだし。そんな些細な行き違いなんてよくあることで、すぐ慣れるから大丈夫だよ」という答えが返ってきた。



さて、フジタ准教授は、この状況でどうすべき(どうすることが倫理的に許容され、また倫理的に要請される)だろうか？また、あなたがフジタ准教授と同じ立場にいたとしたら、どうするだろうか？

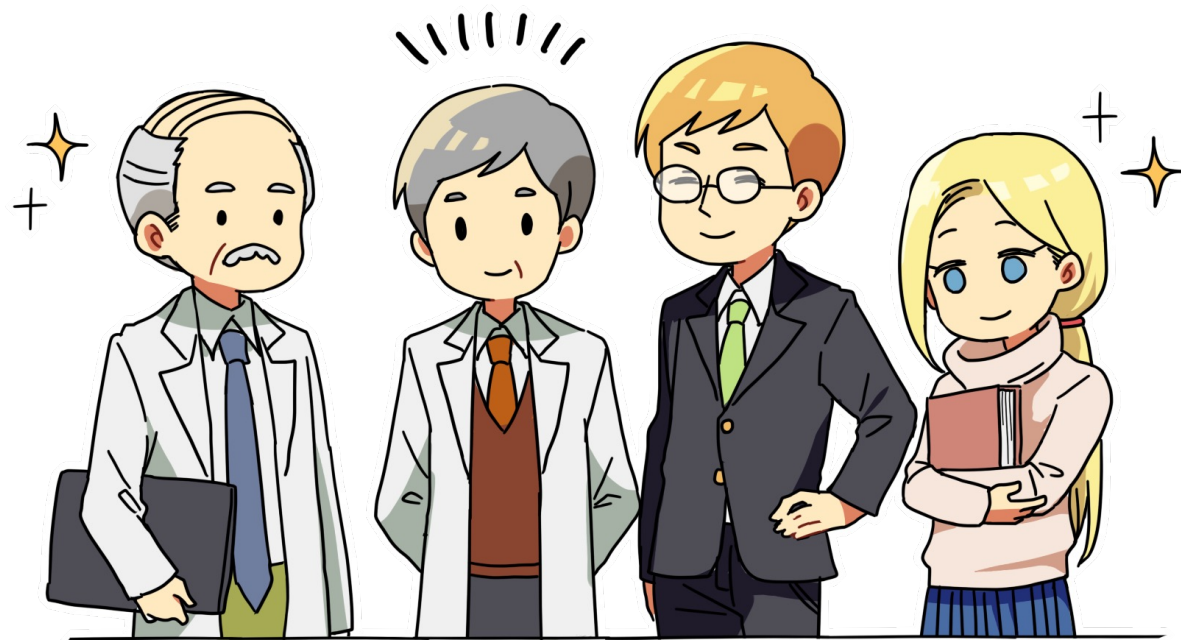


眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、155-156ページ。

6. 「困った上司」



カワシマは、念願かなって国際的に活躍する研究者たちを多く擁する有名研究機関の研究員として働くことになった。カワシマの共同研究者であるタムラ教授は、関連学界では世界的に有名な研究者であり、多額の外部研究資金を獲得して、文部科学省が推進する大型研究プロジェクトの代表者としても活躍している大物である。



実際、タムラ教授の研究能力はきわめて高く、昼夜を問わず研究に没頭して、次々と成果をあげていた。カワシマは、その姿に研究者の原点を見たような気がして尊敬の念を抱いていた。



ただ一つ短所を挙げるとするならば、タムラ教授は、研究費使用に関する事務作業などを滞りなく進めることが苦手であるのに、すべて自分の手で行わないと気が済まない性格が邪魔をして、中途半端に自力で進めようとして結局手に負いきれず、時々ミスをやらかしてしまうところがあった。



ある日カワシマが何気なくネットサーフィンをしていると、ゴシップネタが書き連ねられた匿名掲示板サイトで、タムラ教授の研究費不正使用を告発する書き込みを目撃した。その記述は詳細で、明らかに関係者による内部告発であることが分かる内容であった。



タムラ教授は、研究不正をするような人物ではなく、実際、研究に関してはきわめて厳格で、タムラ教授のもとで指導を受けた学生たちは皆、今や一流の研究者として活躍しており、教育者としての力量もすばらしいものがある。

しかし、研究費使用に関わる手続きや、出入りの業者とのやりとりについては、苦手なせいでかなり杜撰なところがあり、気づかぬうちに不正な処理をしてしまっている可能性は十分にある。



カワシマは、悩んだ。このことが問題視されることになれば、大型研究プロジェクトは白紙に戻されるかもしれない、タムラ教授も処分されて研究機関を追放されるかもしれない。そうなれば、関連学界の学術的発展を遅らせることになる。研究には何の問題もない。問題は、研究費使用が不適切であったということだけである。しかし、大型研究プロジェクトだけに、その金額はかなりの高額であるため、これを不問に付しては大きな社会問題になってしまうだろう。



さて、カワシマは、この状況でどうすべき(どうすることが倫理的に許容され、また倫理的に要請される)だろうか？また、あなたがカワシマと同じ立場にいたとしたらどうするだろうか？

そしてさらに、文部科学省の新ガイドラインを参照しながら、どのように対応するのが研究機関として適切な対応なのか、考えてみよう。



眞嶋俊造、奥田太郎、河野哲也(共編)『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』(慶應義塾大学出版会、2015)、183-184ページ。